

『アメリカン・ディアスポラ』シリーズ第二回

キューバ・センチメンタル

報告者 田沼幸子（大阪大学人間科学研究科特任研究員）

1959年の革命以降、キューバから米国への移動は、当事者および米国政府によって、亡命や政治難民と見なされてきた。1966年にはキューバ難民地位調整法（Cuban Adjustment Act）により、キューバ出身者であれば誰でも、渡米後1年で在住権を申請できるようになった。格差を是正するという革命のもと、他の多くの移民よりも政治経済的階層が高いうえに、米国政府による経済的支援もあったため、1985年に同時に出版された2つのメキシコ出身移民との比較研究では、どちらもキューバ系移民がより短期間に地位が上昇したという結果が出ている。しかしそもそもキューバ系移民が社会の上層部（cream of the society）からなり、米国でも勤勉で法を遵守する模範的な「黄金の亡命者」（Golden Exile）である、という指摘は、キューバから渡米した研究者によるものである。こうした著作を著すとき、そこに、米国に受け入れられたことを感謝し、また、自分たちがそうした待遇に値するということを示すべき理由があったと考えることもできる。

キューバから米国への「亡命」が輝かしい側面ばかりではなく、むしろ精神的に厳しいものだったという指摘は、90年代に1.5世代（幼少時に移民した世代）の著作群でしばしばなされるようになった。政治学者のトーレスは言う。自分たちが大学に入学した頃、米国では反ベトナム戦争やカウンターカルチャー運動が盛んで、学生たちにとって、カストロやチェ・ゲバラはヒーローだった。そうした同年代の米国人学生から、革命キューバを逃れてきた彼女は、たとえそれが「6歳のとき」であれ、反革命のウジ虫(gusanos)だと受けとめられたのである。こうしたなか、プエルトリコ大学のホルヘ・デュアニは、近年、実はキューバから米国への移動が「ハイチ化」「カリブ化」しているという。つまり、他国同様、キューバ人移民の多くは貧しく、有色人種化しつつあり、また、米国領土にたどり着けば別だが、海上で拿捕された場合は本国に送還されるようになったように、キューバ人も他のスペイン語圏のカリブ海移民と共通

する点が増えてきたのだという。しかし、そうした変化によって、自分たちも他の移民と共にあると感じられる、と最後に述べるデュアニは、計らずしも、キューバからのディアスポラが孤立しているという感覚を吐露している。

このような感覚はなぜ起きるのか。1.5 世代のキューバ系アメリカ人政治学者ダミアン・フェルナンデスは、米国でのキューバのイメージというのは、地理的、政治的に隔離され、1960 年代のレトロな時代にとらわれたままの、古風でロマンチックな、「社会的ガラパゴス」なのだという。フィデル・カストロがトップの座を下りたとき、ある在外キューバ人知識人が「キューバがやっと現在に合流した」とコメントしたように、かの国はフィデル・カストロとともに、過去にとらわれたままだという見方がしばしばなされてきた。そしてソ連崩壊とともに始まった「平和時の特別な期間」という、社会主義の原則を逸脱する政策を正当化するためにもうけられた時間が、フィデル退陣後も制限なく続くとき、キューバはサイドがいう「オリエント」のように「無時間な永遠」にとらわれたと米国の人類学者、Hernandez-Reguant は指摘する。キューバ国外では「他者化」され、国内では、どのような政治的原則のものであれ、外国の支配にとらわれないことこそ、この国の誇りだとして本質化されるようになる。社会主義国として「働く者が報われる社会」の実現を掲げながらも、外国からの送金や資本主義経済との接点によって生き延びているという実態の矛盾に対しては、批判や議論が自由にできるわけではない。こうして、多くの人びとは、その矛盾を滑稽な「小咄」(cuentos)として話しあい、笑って不満を発散させる。それはあたかも、ベイトソンがいうダブルバインドにとらわれた者が、統合失調症に至らないためにとる解決策の一つであるようだ。もうひとつの策は、ダブルバインドの関係性を断つことであり、この場合は出国となる。

自分たちの移民は「乗ってきた船を焼くようなもの」という Cuba Sentimental の中で一人の女性がつぶやく言葉は、単純に言えば、制度的に、移民すればキューバ国籍を失う、ということを表している。しかし、ダブルバインドから逃れてきた場合、戻る事は、また、矛盾した言明で身動きがとれなくなってしまう状況に絡めとられてしまうかもしれないという葛藤を意味しているのではないだろうか。ダブルバインドをうむ関係性は、第一の要件として、その相手との関係性がとても大事なものであり、それなしでは生きられないように感じられる、というものがある。革命後のキューバを去ってきた彼らは、「経済的苦境」や「政治的不自由」から逃れてきた、というだけでなく、本来、信

じていたし、今でもどこかで好ましいとも思える革命の指導者や倫理を断ち切らなければ、新しい人生を始める事も、続けることもできない、という苦渋に満ちたアンビバレントな決断を示しているものだと言える。